

『漾虚集』

——「意識」が迷い込む世界——

増満圭子

要旨

夏目漱石の『漾虚集』について、これまで論じられてきたような「夢」や「暗部」という解釈でなく、当時漱石がかなり拘泥していたと思われる「意識」という視点から、その解明を試みた。既に『文学論』の中にも伺えるW・ジェームズの影響を、『宗教的経験の諸相』手沢本調査などを手がかりに、この時期の漱石が、何をジェームズから感じ取り、それをどう作品に反映させていたかを分析し、その新たな意味を考察した。

はじめに

明治三十九年五月に刊行された漱石の『漾虚集』は、早々に小宮豊隆⁽¹⁾が、「内に『夢』と『詩』を抱いて生きてゐた」漱石の「ロマンティズムの世界」と論じてから、それを甘美な世界の表出と見る読みがほぼ定着していたようである。⁽²⁾しかし後に江藤淳⁽³⁾によるあの「深淵説」が提出されて以来、評価は次第に二元的でなく、「夢」か「暗部」か、論者によって異なった見解が示されるようになっていく。例えば瀬沼茂樹⁽⁴⁾の、「いらだつ自己の存在の底にある謎の部分に暗い眼を静かにそそぎ、美しく粧う場所」という捉え方や、三好行雄⁽⁵⁾の「猥

雑な日常で夢想された夢」という見解もある。又内田道雄⁽⁶⁾は、『吾輩は猫である』（以下、『猫』とする）第一章を書き上げた頃の書簡に、「少々鼻について厭気になつて居る」「読んでもちつとも面白くない」とあることを手がかりに、「（『猫』の）出来上がりに不満な漱石が、より自己の本領たるものとして書こうとした」のがこの『漾虚集』であると解く。

確かにどれも卓見ではあるが、けれどもそのような先行論の評価とは少々異なった視点から私はこの『漾虚集』の解明を試みたい。すなわちここに描かれた世界が、漱石の「夢」や「暗部」などでなく、又前作『猫』への「不満」から創作されたものでもない、おそらく、当

『漾虚集』

時漱石がかなり拘泥していたと思われる「意識」という問題に、大きく関わりを持った世界として考える。以下その前提に従ってこれらの作品に込められた新たな意味を考察する。

遙かなる空間へ

この時期漱石を捉えていた「意識」について言うならば、『文学論』を手がかりにまず考えることが可能である。『文学論』そのものについて論ずるのはひとまず割愛させていただくが、ただその『文学論』冒頭で「波」として定義され、図式化までされている「意識」なるものが、あくまでも「F」という焦点的認識で規定された、接触する対象を認知する「機能」として捉えられていることを押さえておく必要があるだろう（但し「意識」に対する漱石の見解はこの後徐々に変化していくこととなる）。従って『文学論』の主眼である「文学的内容の形式」の説明も、その「F」なるもの（及びそれに付随する情緒「f」）を中心に展開されている。こうした当時漱石の意識認識に基づいて、改めてこの『漾虚集』を見てみると、作中に描かれたいかにも不可思議なる空間が、当時そのように漱石が捉えていた「意識」という認知ベクトルの、進み込んでいった世界であると思われる。更にはその異空間に作者漱石の、煩雑なる日常からの解放願望を漂わせ、改めて、どうしようもないこの現実の「生」の姿をも、見ることができのではあるまいか。

例えば、『倫敦塔』において、「悲慘の歴史」をもつという、暗いそ

二

の塔を上る途中、壁に残された幾つもの筆跡から「余」がしきりに當時を想像する場面がある。彼は「斯んなものを書く人の心の中はどの様であつたらう」と考えて、更に「又想像」を繰り返して、やがて「忍ばるる限り堪えらるる限りはこの苦痛と戦つた」人々、「居ても起つてもたまらなく為つた時、始めて釘の折や鋭どき爪を利用して無事の内に仕事を求め、太平の裏に不平を洩し、平地の上に波瀾を画いた」人々の苦悩の状況を次々とその脳裏に浮かべていく。又続けて「此獄に繋がれたる人も亦此大道に従つて生きねばならなかつた」「同時に彼等は死ぬべき運命を眼前に控えて居つた」人々への「想像」を巡らして、そこから当時「爪を磨いだ」獄中の人々が、「失れる爪の先を以て堅き壁の上に一と書」き、「剥がれたる爪の癒ゆるを待つて再び二と書」く様子をも思い浮かべているのだが、果たしてこうした思考活動は一体何を意味するか。

主人公である「余」は、『倫敦塔』という眼前の、現実風景からの刺激により、こうして盛んに思考することで、更に具体的なる当時の状況をその脳裏に再現しているのである。やがてそうするうちに彼の認知機能である「意識」が、次第に現実世界を超越し、当時の状況そのままの、いわゆる異空間にふわふわと潜入を果たしているような錯覚に陥っているものと思われる。

こうした思考の先に表出されているものは、先の先行論に見たような、単なる「夢」の世界でも「無意識」の空間などでもなく、むしろ前作『猫』で迷亭によって語られた、あの「首懸の松」のエピソード

に代表される神秘世界なのである。『猫』において、迷亭は、「ゼームスなどに言はせると副意識下の幽冥界と僕が存在して居る現実界が一種の因果法によつて互に感応したんだらう」と判断し、現実界の渦中にもまるでぼつかりとそこだけ時間が切り取られたような空間の存在を我々の前に示したが、「余」が倫敦塔で見たこうした遙かなる人々に対する想像も、その『猫』に表れた「幽冥界」と同様に、過去の時間と現実の世界がオーバーラップして出現した、全く異次元のものである。現実界に確かに存在する意識が、その「見える」現実を超越し、そこにまるで二重写しのようにして存在する、現在とは異なった世界に漂う様相がここに描出されているのである。

同じ『漾虚集』の中に収められている「カーライル博物館」にも、同様の意識の様相が存在する。博物館を訪れて「天に近き」四階の書齋に上っていったとき、「余」はその具体的風景から、カーライルが「電光的人」であり、「癩癖」の激しい人であったということを、まずは思い浮かべている。恐らく彼はその時に、カーライルがいたと同じ当時の世界に徐々に入り込んでいたともいえるだろう。カーライルが「下層に居るときは考だに及ばなかつた寺の鐘、汽車の笛、偕は何とも知れず遠きより来る下界の声」に感じたと同じ苦痛をこの時「余」も又感じとっていたと思われる。「どうです下りませうかと促す」「婆さん」に、そんな「瞑想」を突然中断されるまで、「余」はカーライルとともに、その意識を確かに十九世紀に漂わせていたのがある。

『猫』において示されたあの「幽冥界」なるものは、決して介入不可能な全く未知の場であつて、むしろ本気で信用することなどできないような、道化的世界ではあつた。そこでは、その未知へと繋がっているはずの「扉」は、常に厳然と存在する現実世界に阻まれて、容易に開かれはしなかつた。けれどもこの『漾虚集』では、『猫』であれば確かかなものとされていたその現実さえ、もはや不安定になっている。そのため現在時との境さえも不鮮明となり、意識はその未知なる空間にいつの間にか在るのである。意識の認知機能なるものが、こうして現実を超越し、遙かなる世界を捉えているといえるだろう。

閉じた世界の中で

更に具体的に検討してみたい。『漾虚集』に収められている短篇の内、「幻影の盾」と「薙露行」は、言うまでもなくアーサー王伝説の、英国中世騎士の世界に因っている。これは、「完結してしまつた遠い過去」の「叙事詩の世界」、「未来へ抜け出す道を全く閉ざされた世界」と見る江藤淳の評価があるとおり、歴史の中にある、閉ざされた空間が描出されている作である。けれどもこの閉じた世界の中にこそ、先の『倫敦塔』に見たような、意識の潜入を認め得る。『倫敦塔』や『カーライル博物館』では、まず始めに「余」の現在時が示されて、そこから次第に、その「余」とともに読者である我々をも現在時とは異質の世界へ潜入させていく方法が取られたが、この『幻影の盾』や『薙露行』に於ては、既に場面設定が、始めから全ての読者

『漾虚集』

(作者自身をも含んだ)を異空間に置いている。

『幻影の盾』の冒頭の、「目に見えぬ怪力をかり、縹緲たる背景の前に写し出さうと考へて」という文により、「意識」の認知すべき対象が、現実世界の全てを疎外して、遙かなる歴史のベールに閉じた中にあることをまずは示しているのである。それら冒頭文の効果と、加えて多少なりとも持ち合わせている読者側の歴史的文学的知識により、既に読む以前から、ここに描かれている世界が過去の物語であるということを読者に認識させている。いわゆる「過去」の「幻影」なる世界空間に、本文に入る前の時点からこうして作者を含めた我々を位置させることを果たしている。

『文学論』に意識の何たるかを説いた漱石が、漠然とはありながら、その意識の認知する対象を現実世界ばかりに固定するのでなく、その現実世界を超越した遙かなる異空間にまで求めている。『文学論』の見地からいえば、「意識の波」は、いつも対象に向かい行き、その対象を捉えようとするものであるのだが、その対象が、この『漾虚集』では、絶対と見られていたはずの現在を越えた空間(幽冥界)の中に求められている。すなわち現在という時空が極めて曖昧な揺れとなっているのだが、果たしてその揺れは一体何を示すのか。それは恐らく、(先に『猫』の引用にもはつきりと「ゼームスの理論」と言及されていたような)当時の漱石を捉えていたらしいW・ジェームズに、深く関わってくる問題であると思われる。

『宗教的経験の諸相』の神秘

当時漱石は盛んにジェームズを読んでいて、その理論にかなり感銘を受けていたらしい。ジェームズと漱石との関わりについては既に多くの諸氏による研究が重ねられている。ただ、それは特に『坑夫』に見られる描出法と、ジェームズが『心理学原理』において主張する「意識の流れ」との関連や、『彼岸過迄』執筆に纏わる臨死体験のエピソードとジェームズの『多元的宇宙』との関わりに重きをおいた見方などに多く見られ、初期漱石とジェームズとの関連性については、まだあまり言及されて来てはいない。けれども先にも指摘した通り、『文学論』や『猫』なども併せて検討してみると、『坑夫』以前の段階でも、漱石のジェームズに対する視線が既に伺えるといえるだろう。そして特にこの初期の段階に限っては、ジェームズの著作でも、『宗教的経験の諸相』(以下『諸相』)へ関心が多大に見られるのである。

筆者自らの手で行った手沢本の調査によれば、『諸相』には全編に渡ってかなりの書き込みや傍線が見られるのであるが、それらを総合して検討してみると、漱石が特に「通常意識」の背後にある「より広大なる意識」の存在にかなりの関心を示していたらしい傾向が具体的に発見できる。そして、それが「幻影の盾」や「薤露行」に描かれている、過去の閉じた世界に対する作者漱石の意図に結びつけられて考えることが可能であろうと思われる。

例えば「人間性に関する研究材料が、今や我々の前に広がっている」という書き出しで始まる第二十講「結論」の冒頭で、ジェームズは、人間意識の在り方を次のように纏めている。

一、見ゆる世界は、もつと霊的な宇宙の一部分であり、見ゆる世界は、その主要なる意義を、この霊的宇宙から引いている。

二、彼のもつと高い宇宙と融合し、調和的関係を結ぶことが我々の真の目的である。

ジェームズは、通常我々が考える覚醒意識というものが、実は意識全体の一つのサンプルにしか過ぎず、その見えざる背後の部分にはより広大なる意識が存在していると説いている。漱石は、こうした部分に盛んにアンダーラインを引きながら、いわゆる机上の理論としてひとまず理解できるその問題に対して、改めて、独自の解釈を求めようとするために、作品を描いていたのであらうと思われる。

すなわち、「我々の通常意識、いわゆる合理的意識が意識の特殊型に過ぎず、その周囲には頗る薄い膜を隔てて、全く違う意識の可能が存在する」と指摘するジェームズの主張を受けて漱石は、まず、作品『猫』において、その扉の存在を示唆しつつ、遙かなる霊的宇宙の模様を模索しようとしていたのである。そして、その霊的宇宙そのものの内部、有様として、この『漾虚集』を描き、更に具体的にその世界を表した。すなわち、『猫』に「ゼームス」の名を直接的に取り上げ

て、未知空間への「扉」を示した後、次の小品世界において、現実世界に存在する我々の意識ベクトルを、その過去の歴史と伝説の「大いなる意識」空間に「没入」させていく方法を取り入れているのである。従って、前章で指摘したような、『幻影の盾』や『薤露行』に描かれた過去の閉じた世界への作者の目というものも、ジェームズからの示唆による一つの構想であるともいえるだろう。

すると、『漾虚集』に収められている更なる三編、「一夜」、「琴のそら音」、「趣味の遺伝」についてもやはり同様の視点からの解釈が可能であらうと思われる。但しこれらには作中における異空間というものがある、先のような「過去」世界でなく、現実の中における、より霊的神秘的領域として示されている。「意識」は、時間的隔たりを越えた過去でなく、現実の更に向こう側に存在する「幽冥界」へと向かっている。「琴のそら音」での幽冥界への潜入は、「僕も気楽に幽霊でも研究してみたいが——」と呑気に構える「余」が、やがて津田君の不思議な話に引き込まれ、図らずも「今夜のうち、夜の明けぬうち何かあるに相違ない」との懸念を抱く展開に進行しているのだが、これも当時の漱石の、現実という側から遙かなる幽冥界を見る視線として解釈することが出来るだろう。『趣味の遺伝』でも時空を越えた男女の愛の感応が「遺伝」的要素として真面目に示されている。「一夜」も又意識という観点から分析するとならば、ただ文中に「八畳の座敷に髭のある人と、髭のない人と、涼しき眼の女が会って、斯の如く一夜を過ごした。彼等の一夜を描いたのは彼等の生涯を描いた」とあるよ

うに、それぞれの人物に象徴される「生」が幻想的に描かれた、いわば意識の漂う有様の可視的表現と見ることが可能である。それは、現実には密着している世界であり、又この現実を超越した遙かなる意識世界の露呈としても読みとることが出来るだろう。

ただしここで忘れてはならぬのは、こうした視線がどれも結局は、(考えようによっては『猫』の場合と同様に)「なあに、みんな神経さ。自分の心に恐いと思うから自然幽霊だつて増長してでたくならあね」という(『琴のそら音』の後半、「神楽坂の床屋」の)言葉にあるような、「自分ながら愚の至り」「何だか馬鹿々々しい。馬鹿々々しい」笑い話に収斂されていくものであり、このことから、作者漱石が、ジェームズの説く神秘世界の領域に、強い関心を示しながらも、それに対してこの時点ではまだ全面的に共感していないことが伺えるのである。

すなわち、確かに漱石は『諸相』によって導かれ、そこに興味を抱いていたからこそ、作品の中に、「幽冥界」なる神秘領域を表して、自らをも含めた読者を強引にその世界へ導こうとはしているが、結局その幽冥界なるものが何たるかということを、彼は『諸相』の中だけで十分に納得出来ていない。ジェームズのいう現実意識を超越したより広大なる意識存在に、理論の上ではわかつて、確信を得られない為に、より一層この『漾虚集』が、「過去」や「霊界」としての空間それ自体でなく、認知すべき対象を探しつつ動き回る意識ベクトルの行きつく様として、描き出されているといえるだろう。従って、この

時点で漱石が本当に描き出したかったのは、異空間そのものの神秘性などではなく、その中にそろそろと潜入し、何かを探り出そうとする意識そのものである。我々が存在する現実が、必ずしも絶対的なものでない、それぞれの意識の持ち方によって、いとも簡単に揺らぎ易い、極めて不安定な場だという認識なのである。現実には、『猫』で示されたように、悪さしても平然と存在する不条理に満ちた世界ではあるのだが、人間の意識からの認知対象として見たときは、強固だったはずのその現実が、いとも簡単に不安定なものとなる。厳然たる「現実世界」に対する新たな解釈を、漱石は「意識」の進みゆく対象としてここに表出しているのである。

水底の感

ところで、漱石は、『猫』を書き始める約一年前、明治三十七年二月八日、寺田寅彦に不可解な葉書を書き送っている。その全文は次の通りである。

水底の感

藤村操女子

水の底、水の底。住まば水の底。深き契り、深く沈めて、永く住まん、君と我。

黒髪の、長き乱れ、藻屑もつれて、ゆるく漾ふ。夢ならぬ夢の命か。暗からぬ暗きあたり。

うれし水底。清き吾等に、譏り遠く憂透らず。有耶無耶の心ゆら

ぎて、愛の影ほの見ゆ。

この詩について、越智治雄が、「これは女性からの夢の境域への誘いのだ」というように、漱石の夢の世界を重視した見方を示している。一方江藤淳⁽⁸⁾は、嫂登世に対する金之助の思慕に拘って、ここにかかれた「水底」を、「彼が必死に模索していた薄明の世界の安息」であると分析する。又、これが寺田寅彦宛私信にかかれた内容であるという事実⁽⁹⁾に固執して、ちょうどその時期結核のために夭逝した寅彦の妻夏子への、寅彦の深き思いを土台として、漱石がこの詩を書いたと指摘する藤井淑禎⁽⁹⁾の論もある。更には、当時漱石が水彩画に凝っていた、イギリス浪漫主義の画家ワッツの素描をしきりに模写していたことなどの関連から、詩の具体的解釈を否定して、そこに抽象性のみを見た上で、「漱石の心情がイマジネーションの中で解放され、自由に飛翔していることを示している」という、中島国彦⁽¹⁰⁾の見方もある。けれども、改めて意識という観点から、もう一度この詩を見てみると、当時の漱石の見る世界が明らかになってくる。

まず「水底の感」という詩の筆名が「藤村操女子」とあることから、華厳の滝に身を沈めた当時の事件が想起されるのは、当然のことでもあるのだが、それを重みのあることとして、これまでの論では余り触れられていなかった傾向が見られる。わずかに前出の越智氏の論のなかでのみ、筆名の「藤村操女子」とあるのに着眼し、「女性」からの「夢への誘い」と見る根拠としていただけである。

果たして、漱石の「水底の感」は何故、「藤村操女子」として、書

かれたか。改めて事実を具体的にたどるとすれば、その「藤村操」は明治三十六年五月二十六日、華厳の滝の絶頂にある檜の大樹に、「巖頭之感」と題する一文を彫りつけて投身自殺したのである。当時第一高等学校の授業も担当していた漱石は、授業中予習をしてきていなかった藤村を叱責した事があったという。藤村の自殺は丁度その後だったのでかなり気に掛けていたらしい。

後に藤村操の妹恭子と結婚した阿部能成⁽¹¹⁾は、藤村の自殺には失恋の痛手が原因としてあったのかも知れないと推測し、後年「これは他人にわからぬ謎であらうが、私は彼の少年らしい学問的大望の幻滅に加へて、失恋の跡がみられるやうな気がする」と回想している。もしかしたらそのときの漱石も（藤村が、全く未知なる学生でなかった為）、それが世間で騒がれていたような「哲学的自殺」でなく、背後には何らかの恋愛の苦しみや失恋があったのではないかと感じとっていたのかも知れない。

けれども、それらの見解とは又別の視点から、この「水底の感」を、藤村自殺事件を通過した漱石の一つの「作品」として見なすことは出来まいか。たとえば、「猫」の中で「吾輩」が鼠を捕ろうとあれこれと作戦を企てる場面に於て、

夫でもまだ心配が取れぬから、どう云ふものと段々考へて見ると漸く分つた。三個の計略のうち何れを選んだのが尤も得策であるかの問題に對して、自ら明瞭なる答弁を得るに苦しむからの煩

『濛虚集』

悶である。

(注・傍点は、筆者)とも用いられているように、藤村の自殺を契機として、当時この「煩悶」するということが、学生達の間で一種のブームをもたらしていた事実がある。それは藤村が死の直前に華嚴の滝で「巖頭之感」と題した辞世を残していたことにも由来する。

悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす、ホレーシヨの哲学竟に何等のオーソリチーを価するものぞ、万有の真相は唯一言にして悉す、曰く「不可解」、我この恨を懷いて煩悶終に死を決す、既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし、始めて知る、大なる悲観は大なる樂觀に一致するを。

(明治三十六年五月二十七日「報知新聞」)

この藤村操の自殺に代表される当時の青年達の「煩悶」というものは、例えば、明治三十六年の『太陽』八月号に掲載されていた、姉崎正治の論「現時青年の苦悶について」の中に、

今日の社会も教育も共に形式が定まりすぎておる、生れて始めて「我れ」といふ者に逢着して、其の「我れ」の自由の発露を生命とする青年に少しも自由を与へない、彼らをして萎靡せしめ畏縮せしむる型の中に投じなければ已まぬ、たまに本能の尊嚴を主張する者があれば、やれ危険だそれ不都合だといつて之をた、きつ

八

けようとす、其結果多くの青年をして其の天真の本性を發揮するの機会を失はしめて、或は平凡化して老成した若年寄とならしめ、或は位置名利の奴隸とならしめ、或は懷疑の苦悶に陥らしめ、或は失望の極自暴自棄して墮落せしめておる、(略)個人の「我れ」がまだ十分に知れておらぬ、其の「我れ」の問題の為に煩悶しておる青年に、大な国家の影を持て来て之を拝めといふ(略)青年は外部から来る壓制束縛の苦痛の為に一層多く自分の内の煩悶を感じるのである、

と書かれていたように、「個人」と「社会」といういわゆる二元論的な分裂に基づくものであった。そしてそれを止揚するものとして、当時の藤村事件に対して最も重要な役割を果たしたのが黒岩涙香である。彼は明治三十六年五月二十七日の『万朝報』に「少年哲学者を弔す」と題した文を乗せている。

那珂博士の甥、藤村操、年十八にして宇宙の疑問解けざるとを恨み、日光山奥の華嚴の滝に投じて死す。(略)哲学の多くは信仰を有せず、全く暗室に、なき黒帽を探るなり、唯だ心的一元論に至りて、初めて信仰あり、暗室を去りて明所に至るなり、人々に依りて光明に接するを得。

余天人論を著す、人をして明白々の室に黒帽を看認めしめんと欲するの微意なり、恨むらく、巖頭に感を書して、六十丈の懸泉

に投じたる此の少年哲学者に一冊を寄献するを得ざりしとを。

ここで涙香が、自らの著名を「天人論の著者」としたことや、更にその文中に、「余天人論を著す、人をして明白々の室に黒帽を看認めしめんと欲するの微意なり、恨むらく巖頭に感を書して、六十丈の懸泉に投じたる此の少年哲学者に一冊を寄献するを得ざりしとを」などと記したことなどから、この『天人論』は、当時、藤村の自殺の背景を読み解く為の解説書のように持てはやされ、かなり広く読まれるようになったらしい。高橋新太郎の調査⁽¹²⁾によれば、それは発売後すぐに大評判となり相当な売れ行きだったようである。一柳廣孝⁽¹³⁾は、その『天人論』が冒頭で「廿世紀の学問は『心霊』を以て第一の問題と為すなるべし、今既に学者の頭脳は之れに集中せんとする傾向あり」と「靈魂論」復活を指摘していることから「『煩悶の時代』における精神優位の思想を『科学』の側から補強する」役割を果たした書と位置付ける。

具体的に明治三十六（一九〇三）年五月に朝報社から出版された涙香のその『天人論』を見てみると、興味ある部分がいくつも発見できる。例えばその第四章第三項、「心霊」と題された章には、

心霊は性格にも意志にも感情にも拘らず発動して、時々人の内心を衝き、刻々に人の良心に警告す、故に吾人は感情の暗に立ちても、肉欲の底に溺れても、酒色に沈溺しても、栄華を極めても、常に内より心に針せらるゝが如き痛みを覚え、自ら安ずる能

はざる所あり、（略）人の意志は自由に非ず、此の心霊のみが自由なり。

と書かれている。又、別の箇所でも涙香は、「心霊は人間の自観の根底なり」と説いている。まず第一に、「心霊」なるものがあり、それが人の心を支配しているというのである。すなわち我々が眼にする物象の世界とは、決して現実の世界でなく、人間に内在する心霊の世界だということを証明し、そこに人間の精神性を回復しようとするのがこの『天人論』なのである。藤村は、華嚴の滝の絶頂から身を投げ出して死に至り、そして世に「煩悶」を目覚めさせ、涙香に代表される如く、世間を心霊界へと誘った。そして空前の心霊ブームというのがここから国中に広がっていたのである。

藤村操の死に関心を示し、ある種自責の念までも感じていた漱石が、この『天人論』に、まるで無関心だったとは思えない。ただ涙香や『天人論』に対する漱石の直接的言及は日記や書簡の中にも何も残されてはいないので確定的なものは立証しがたいが、私はかの「水底之感」こそが、涙香の煩悶青年たちに示した見解に対する、漱石的な回答ではなかったかと思えて仕方がない。「水底之感」という題名が、先に取り上げた藤村の「巖頭之感」とまさに対照的な題であること、加えてその筆名が「藤村操女子」とかかれていることなども又何らかの関連性があるものと受け取れる。そしてこの時恐らく漱石は、社会と個人との間の苦悩、いわゆる二元論的な分裂として「煩

『濛虚集』

悶」を捉える苦悩それ自体にも、又それを心靈学的一元論へと繋げる涙香にも、結局は、同調出来ずにいたのであらうと思われる。

「巖頭」からみた世界は、一体どのような世界として、かの青年の眼に映ったか。漱石はその疑問を抱いたまま、上ではなく、藤村が飛び込んだ水底の、深き場から静かに眼をあけた。それが「水底之感」なのである。「水の底、水の底。住まば水の底。深き契り、深く沈めて、永く住まん、君と我」確かに中島氏のいうように、この「君」や「我」が示すのが、具体的にだれであるかを探るのは、無意味なことかも知れない。すなわち、その深き水底に漂うのは、人という生身の身体などでなく、いわゆる意識そのものである。ふとした瞬間に扉を開けて迷い込んだその世界で、意識は自在に漂うことが許される。広大なる、捉えどころなき「幽冥界」、その異次元の空間に漂う「我」としての存在が、そこで心地よく、休らいた思いを感じている。

『猫』のあのエピソードの中で、「水底」からの静かなる呼びかけに、何度も寒月が振り向くのも、彼の意識が、未知なる潜在意識の奥底から、呼びかけられたからである。扉の向うに広く繋がっている幽冥界、寒月が、無意識的にそれを思念していたからこそ、それが暗き川の水の底という象徴を伴って、表現されている。

意識それ自体は、いわゆる幽霊や妖怪などによってもたらされる心靈現象のように、決して自己にとって未知の領域でも、他の力によって支配されているものでもない。たとえ自己認識においては、無自覚

な場合であっても、そのベクトルは、我々の深層の部分から、独力でやってきて、独力で進み、又還っていくものである。

ちょうど英国留学中に求めたジェームズの『宗教的経験の諸相』などの書物から、漱石が、心理現象なるものに独自の見方を確立しつつあった時期である。「意識は流れ行く」という定義。その意識があつて、それが、背後のより大いなる意識へと融合する。「意識する人は、救いの経験の通路である、もつと広大な自我と連続する」とジェームズの説くそれは、あくまでも個々人自らを通過して、移行して行くものであり、意識ベクトルの根元的力は、自己にある。

現実世界を認識する通常意識が、その背後に広大に存在すると思われる潜在意識の前に立ち尽くしているのと同様に、この現実というのが、未知なる不可思議な世界と二重に存在している。その幻想界に潜入し、迷うことは、何とも心地良く、現実のしがらみの一切、苦悩の一切を、切り離して漂うことが出来る快感すら生ずるものである。

青年藤村操が逝ってしまった水底は、漂いの異空間、遙かなるあちら側の世界である。けれども現実に生を持つ我々は、そうして逃げてばかりはいられない。心靈の世界、精神の世界の優位性を幻想することは、結局は現実逃避でしかない。ただ幻想に漂うことだけでは、実際に存在するこの現実世界の苦しみや悩みは、何も解決することなどできないと、ジェームズを読みながら漱石は次第に気づいていったのであった。だからこそやがて異空間を漂っていたその意識は、改めて現実へと、自らの力で戻ってくる。再び始まる、新たな生との対峙で

ある。

そのような当時の漱石の、意識的側面から改めてこの『漾虚集』を読み説けば、更に、その位置が確定できるように思われる。『琴のそら音』における霊の感応が、半ば否定的に語られるのも、又、『趣味の遺伝』で、遙かなる過去からそれが誘われてくるのも、意識のベクトルが、ふと迷い込む不可思議なる空間を、何とも明確に捉えきれない当時の漱石の姿そのものとして考えることもできるだろう。

幼き頃から求めていた自らのより強固なる精神性の希求、己は一体何なのか、という自らの内部からわき上がってくる不安を何とか押さえようとしていた漱石ではあるのだが、しかしくら儒学や陽明学など東洋思想にその救いを求めても、それは結局彼を東洋的理想の高みへと引き上げようとするだけで、心の奥に潜んでいる揺れる自己や不安というものを、なんら解消させることはない。そんなとき西洋の哲学や心理学に触れた漱石が、ジェームズの説く「揺れる意識」「流れる意識」によって導かれ、自己存在の不安をあくまでも揺れるままに是認して、ありのままの自己を受容する方法を得たのである。そしてあくまでもそうした自身の捉え方に基づいた自己意識の描出の一つとして、彼は意識の進みゆく様を作品に表した。ジェームズの理論に同調出来る部分はそのまに、又それに納得しきれない部分は、無理に自己に強制せず、進みゆく意識ベクトルの認知対象としての世界を作品に表した。

だからこそ、この時点での漱石の描く「意識」というものは、現実

『漾虚集』

と異空間とをたださまよっているだけで、何ら確信的なるものなどは、表出されていない。そして当然のことながら、後期作品に見られるようになる、自己存在そのものへの懐疑、自己内部への深き潜入もまだ為されてなどもない。意識はまだ、ベクトルとしてその認知すべき対象を探しているのみである。現実の世界に不安を抱えたまま、（自己自身の内部に対する詮索や自己の内なる変化を課すのでなく）ただ、遙かなる未知世界へ潜入を果たすことにより、自己の不安が一時解消されたかのような錯覚を得たのである。美しく真理に満ちた、幻のようなその世界で、現世の苦悩は一瞬時癒されたともいえるだろう。

けれども、幻想のいわゆる他の世界へと届くその視線の根元は、常に現実の世に生きる自己自身につながれている。藤村のように死を選ばぬ限り、結局は現実から逃げられない。ふとしたことがきっかけで、それはすぐにこの現実へと戻されて、意識の根源である自身には、現実と異次元が錯綜したような奇妙な残滓だけがある。現実とは、やはり厳然と存在する。『猫』に示され、そして『漾虚集』で漂った幽冥界の異空間に、完全に同化しなかった意識は、何処か醒めていたともいえるだろう。通常意識を越えた遙かなる空間は、幻想的で、夢幻的ではあったけれども、自己が存在する位置として確定することなど出来はしない。こうした未知なる空間は、ジェームズのいうような「宗教的」絶対神と同化して、自己をより広大な、大いなる自己へと導くような慰藉をもたらす場所だとは、漱石にはどうしても共感しき

『漾虚集』

れなかったのであった。(やがてその開かれたはずの幽冥界への扉は静かに閉じられることになるのだが)ひとまずこの時期の漱石は、ジェームズのいう「通常意識」の認識を越えて存在する遙かなる世界というものを、自らの手で何とか探りだしそうとするために、作品に挑んでいたと考えることが可能だろう。それが、この『漾虚集』なのである。

注(1) 小宮豊隆『漱石の芸術』(昭和十一年二月、岩波書店)

(2) 森田草平『漱石の文学』(昭和二十一年、東西出版)、板垣直子『漱石・鴉外・藤村』(昭和二十一年、巖松堂)、岡崎義恵『漱石と微笑』(昭和二十二年、生活社)などがある。いずれも小宮説に同調した見解である。

(3) 『猫』の冷酷な風刺の背後から浮かび上がってくる孤独な作者が、『漾虚集』のある作品の中ではその内面を断ち割って、自らの内部に暗く澱んでいる深淵をさらけだしているのである。(江藤淳『夏目漱石』、昭和三十一年一月、東京ライフ社初出)

(4) 瀬沼茂樹『夏目漱石』(昭和三十七年三月、東京大学出版会)

(5) 三好行雄『人生と夢』『国文学』(昭和五十一年一月)

(6) 内田道雄『漾虚集』の問題』『文学』三四卷七号(昭和四十一年六月)

(7) 越智治雄『漱石と夢の極点』『国文学』(昭和四十九年一月)

(8) 江藤淳『漱石とその時代・第二部』

(9) 「先立つ女」をめぐる——「水底の感」と「琴のそら音」——『不如帰の時代——水底の漱石と青年たち——』(平成二年三月、名古屋大学出版会)

(10) 中島国彦『夏目漱石の手紙』(平成六年四月、大修館書店)

(11) 阿部能成『我が生ひ立ち』(昭和四十一年十一月、岩波書店)

(12) 『巖頭之感』の波紋』(『文学』、昭和六十一年八月)
(13) 一柳廣孝『こっくりさんと千里眼』(平成六年八月、講談社)